



自然の解説者

秋季号 [第 49 号] 2015 年 10 月 13 日

NPO 法人

ぐんま緑のインタープリター協会紙
事務局：〒375-0011 藤岡市岡之郷 1179-3
櫻井昭寛 方
電話・Fax 0274-42-2726
<http://inpuri.web.fc2.com/>
編集：総務企画部会

ぐんま緑の県民税を導入しました

群馬県環境森林部林政課 補佐(林政推進係長) 小林 直己

群馬県は、3分の2を森林が占める関東一の森林県です。豊かな水を育み、災害を防止等、県民の暮らしを支え、多くの恵みをもたらしてくれる森林は、県民共有の財産です。県では、この大切な森林を守り、育て、次の世代に引き継いでいくため、「ぐんま緑の県民税」を平成26年4月から導入しました。税額は、県内に住所がある人、事務所又は家屋敷などを持っている人は年間700円、県内に事務所・事業所などを持っている法人などは、法人の県民税均等割の税額の7%相当額です。「ぐんま緑の県民税」の使い道は①条件不利により林業が成り立たず放置されている人工林の整備などを行う「水源地域等の森林整備」②森林ボランティア情報の収集、提供、資機材の貸し出し等、一体的なサポートを行う拠点の整備や森林環境教育を推進するための指導者を養成する「ボランティア活動・森林環境教育の推進」③地域の実情に合わせ、市町村と地域住民やNPO・ボランティア団体が行う事業を支援する「市町村提案型事業」です。平成26年度の実績は「水源地域等の森林整備」で約400ha整備し、「ボランティア活動・森林環境教育の推進」で森林ボランティア支援センターの設置や指導者育成カリキュラムの作成を行いました。

「市町村提案型事業」では、イノシシの住み処となった藪の刈払い、児童生徒を対象とした森林体験教室、絶滅危惧種の保護活動など、29市町村の93事業に対し支援を行いました。1年経過してわかった課題は、「水源地域等の森林整備」では、放置された森林が対象のため、所有者や境界が不明瞭な現場が多く、その特定に多大な労務と時間がかかること。「市町村提案型事業」では、地元自治会やNPO・ボランティア団体が参加した体制づくりに時間がかかることなどです。「ぐんま緑の県民税」は、皆様からいただいた貴重な税金を財源としているため、明らかになった課題を克服し、関係者の皆様の協力をいただきながら、「ぐんま緑の県民基金事業」を着実に推進し、その成果を県民の皆様にも実感してもらえよう取り組んで参ります。



水源地域等の森林整備で実施した間伐



市町村提案型事業で実施した竹林整備



手ごろな葉は食品を包むのに使われた

顧問 亀井 健一

昔は植物の葉が食品を包むのによく使われていました。私達の先祖は自然物を実に巧みに利用していたのです。紙が簡単には入手できなかったからです。現代においても伝統的に葉が使われているものもあります。葉の代わりに葉を模したビニールが使われることがありますが、情緒がなく興ざめます。自然体験の指導では、手ごろな葉を取らせて何に使えるか、考えさせるとよいでしょう。幾つか例を上げてみます。

ホオノキ：大きな楕円形の葉は、種々使われていた。枯れた葉を焼くと香りがよく「朴葉味噌」に使う。もともとは岐阜県高山地方の郷土料理であった。**カシワ**：餡（あん）の入った餅をこの葉で包み蒸したものが「柏餅」である。他種の葉も使われている。端午の節句に柏餅やちまきを食べる風習（文化）がある。**アカメガシワ**：新芽が赤くなり、葉が大きい植物である。カシワの代わりに使われたのでアカメガシワと呼ばれた。**サルトリイバラ**：カシワの葉が簡単に得られない地域では、身近な山野に多いサルトリイバラが多く使われ、柏餅と呼ばれていた。**サクラ**：葉が大きいオオシマザクラの葉は、「桜餅」に使われる。特有のよい香りは、葉に含まれるクマリンなどによるもの。**カキノキ**：この葉を利用した「柿の葉寿司」が有名。もともとは奈良や和歌山などの郷土料理である。カキノキの葉には殺菌作用があると言われている。**ヤブツバキ**：和菓子を載せる敷き葉に多く使われている。敷き葉にはサルトリイバラなども使われた。

ササ類：こねた米の粉をササの葉で巻き、蒸した菓子が「ちまき」である。タケノコの皮、ワラなども使われた。なお、多雪山地に生えるチマキザサは葉が大きく、ちまきに使われることから、この名がある。**ゲットウ（月桃）**：沖縄に多く生えているショウガ科の常緑多年草。大きな葉は、饅頭の包装や肉・魚を包み蒸すのに使われる。この葉には殺菌や抗菌の作用があることが知られている。他に、ナラ類（コナラ、ミズナラ）、カシ類（シラカシ、アラカシなど）、クヌギ、クリ、マテバシイ、ミョウガ、フキ、クズなどの葉が、臨機応変に使われていた。



ホオノキ

＜協会活動のトピック＞

●観音山ファミリーパーク自然調査プロジェクト

昨年9月、県立観音山ファミリーパークの野町隆宏園長より「園の東側に広がる自然の森を有効に活用したい。自然調査や自然観察で協力してもらえないか。」との話がありました。協会では、身近な雑木林の里山を協会のマイフィールドとして活用できること、自然観察会の講師として学習の場になることから協力していくこととしました。月1、2回の植生調査と動物調査を行い、そのデータを元に平成27年度は、春夏秋の3回(5/16、8/22、10/31)の自然観察会を行うことを計画しました。今年9月までに23回の調査や打合せを行い、植生調査では、木本95種、草本80種(主に花や実)を確認し、動物調査ではイノシシやシカ、アナグマをはじめとする哺乳類13種を、鳥類調査では21種を確認しました。

「自然の森」に咲く、季節の花ごよみを作るため、今後も植生調査を継続していきます。また来年度からは定例の自然観察会を行う予定ですので、協会の参加と協力をお願いします。

●8/28 株式会社サンワ 美しいふるさと基金 遠藤宗司様より運営資金として30万円ご寄付頂きました。

＜活動報告＞

生きもの観察とクラフト 前橋市委託事業1 7月18日(土) おおさる山乃家 受託協力部会

11家族28名、協会員12名参加。あいにくの雨のためネイチャークラフトを午前に変更し、大澤講師の指導で木製ピンチを土台に、木の実などを貼り付け、マグネットやオブジェを作りました。午後雨はやまず、屋内での座学になってしまいましたが、浦野講師の話術と、袋から次々と出てくる観察素材に、子どもたちの目は終始キラキラし、楽しく賑やかに自然に親しみました。作品と、「笛になるよ」と配られたムクロジの実が、記念のお土産になりました。(大澤)



木工を楽しもう 森の体験1 7月26日(日) 赤城木の家 受託協力部会

赤城ふれあいの森「木の家」で、吉田卓一、五十嵐、大澤講師の指導で「焼き杉の花器」を作りました。その日、前橋は猛暑日!赤城山の中腹とはいえかなりの暑さでした。その暑さの中での作業も誰ひとりダレることなく集中している姿に感動しました。協会員の指導の賜物でしょうか?作品は皆キレイに仕上がりました。一般11名、協会員16名の参加でした。(戸丸)



川の生き物と水鉄砲作り 前橋市委託事業2 8月1日(土) おおさる山乃家 受託協力部会

一般親子20名、協会員12名参加。午前中、土屋講師の指導で水生昆虫の採集調査を行いました。サワガニなど、きれいな水に住む生き物が多くいました。午後は吉田卓一講師の指導で水鉄砲を親子で一緒に作って、的あてゲームをしました。楽しい夏休みの思い出ができたことでしょう。(櫻井陽子)



赤城山夏の自然観察会 会員資質向上研修5 8月2日(日) 赤城山 総務企画部会

コースは春と同じ。協会員18名参加。蒸し暑い下界も羨む24℃。浦野、櫻井、大谷、土屋講師による明解な自然解説は憧れさえいただく観察会でした。大沼と15mの湖水面標高差を分ける覚満淵西端の小堰堤の役割、湿生植物・樹林帯の植生、シカの食害実態など、コースは驚嘆の連続でした。小沼を経て、時季には紅色に染まるという血の池に立ち寄り、地蔵岳横の下山路では食事のアサギマダラに出会う、感動の研修山行でした。(久保田)



赤城の自然を楽しもう 森の体験2 8月9日(日) 赤城山 受託協力部会

子供29名、自然の家スタッフ4名と協会員13名が参加しました。参加者は、覚満淵の周囲を協会員に引率されて、6人の講師(関端、浦野、亀井、須藤、大谷、土屋)が解説する場所を回りました。講師は、動植物と環境、苔の話、照度計をつかって草や樹木と明るさの関係など、少し難しい話もしましたが、みな熱心に話を聞いていました。(櫻井陽子)



榛名の自然を観察しよう 森の体験3 9月6日(日) 榛名山 受託協力部会

一般9名、協会員15名が参加し、親子班(10名)と大人班(14名)に分かれて観察しました。大人班は浦野講師、大谷講師が担当し、つつじが丘~つつじが峰の観察ではカエデの種類の多さに気づかされました。樹林内では照度計を使って光の強さの違いを比べました。(五十嵐)



親子班は須藤講師が担当して、キノコや花などを見つけたら○をつけるビンゴ表を片手に出発。自然観察をしながら蒸し湯跡、もみじの広場まで進みましたが、雨が降り出し管理棟に避難してお弁当となりました。午後はワシノ巣風穴までクイズをしながら往復し、残りのクイズやゲームを管理棟で行いました。途中から雨が降り残念でしたが、管理棟の中で体を寄せ合ってクイズ等を楽しむのも、また一つの思い出になったと思います。(大澤)

インプリの森整備 7月11日、25日、8月8日、23日、9月6日、12日 インプリの森部会

7月：暑くなり参加者が減ったがチップ処理、刈り払い機を使用した斜面整備を行いました。8月：相変わらず暑さが続いたが、植樹した木の周りを鎌を使い手作業で草刈り、ツル切りを行いました。足場が悪く急斜面で厳しい作業でした。9月：刈り払い機を使用して緑の県民税対象地区「三夜沢地区」下刈りとインプリの森のササ刈りをしました。(吉本)



緑の窓

モズの『はやにえ』

第7期生 浦野 安孫



2013年の2月の雪の日の事だった。我が家のオオムラサキの飼育棟内を、三羽の鳥が忙しく飛び回っていた。飼育棟内を飛ぶ鳥を見るのは初めてだったが、「大雪の影響でネットの隙間からでも潜り込んだのだろう・・・」と軽く考え、気にも留めなかった。2〜3時間ほどして小屋を覗くと、ネットに止まる一羽の鳥が目に入った。

羽根の色やくちばしの特徴から、モズだと分かった。飛び回っていた時には、ホウジロが三羽と思ったが、内一羽はモズだった。「他の二羽はどうしたのだろう」とネットの中を覗き込んでギョッとした。目の前のエノキの枝に、首から下の無いホウジロの血も滴る生首が、突き刺してあった……。さらに良く見ると、近くのクヌギの枝には、もう一つ全く同じ形のホウジロのギロチンもあった……。二羽のホウジロが、モズの餌食になった事を理解するには時間がかかった。大雪で空腹だったとは言え、恐るべきモズの食欲と残忍性。モズの『はやにえ』の対象には小鳥やネズミ、トカゲやカエル、もっと小型の昆虫類等、様々な事例が報告され、自分も今までに相当数の事例を目にして来たが、これ程生々しい『はやにえ』に遭遇したのは初めてだった。では、「なぜモズは、はやにえを行うのだろうか?」・・・、諸説あるが、次の5つにまとめられる。



モズ

- 1、モズの持つ生まれつきの残忍性のあらわれで一種の遊び
- 2、エサの不足する冬への準備
- 3、自分の縄張り(テリトリー)を他の鳥に知らせる印
- 4、モズが摂食中に他の動物が近付いたため、食べ残しをそのままにして逃げた後の残骸
- 5、くちばしは鋭くて生きた動物を捕食するには向いているが、脚の爪が弱いため獲物を枝に刺して食い易くするためのモズの食餌法

さて皆さんは、「ホウジロの生首」の事例からは、1〜5の「モズのはやにえ」説の中で一番説得力があるのは、どれとお考えだろうか?・・・自然界には謎が多く、興味が尽きない。



枝につき刺されたホウジロ

豆知識

ハコネサンショウウオの不思議を追って・・・6種に分類

群馬県自然環境調査研究会会員 金井 賢一郎

ハコネサンショウウオは不思議な存在である。いろいろの地方で「食用にしていた」「薬だった」あるいは「鉱石をなめるキンネブリ」などと言われ、親しまれているようだが、ハコネサンショウウオ(以下ハコネ)の実際の生態について明らかになってきたのはそう古いことではない。ハコネの生態は、他のサンショウウオと比べ大きく違うところがある。たとえば、日本のサンショウウオ類のうちで成体の全長に対する尾の割合が最も大きいとされること。成体になっても肺ができないこと。陸上り後の呼吸は主に皮膚呼吸で、低温の湧き水のあるようなところにひそむから成体の産卵場所もみることがない人が多い。加えて、名前のハコネは、初めて発見されたのが箱根であったから名付けられたので、上記の生態的特徴などが同じなので生息を確認したところではすべて同一(同種)と考えられてきたようである。最近、学問的に全国の分布を東北型、関西型、四国型などと、ハコネの体色、全長の比率などに違いがあるようだとか細かい研究がされて来た。図1に示した分布図のように6種に分類されることが発表された。(2012-2014年)

ちなみに群馬県の本種の和名は、いままでどおり「ハコネサンショウウオ」のままである。(学名は省略)



引用文献：吉川夏彦(2015)『最近の日本産ハコネサンショウウオ属の分類に関する雑記』両生類誌 27、1〜9

<哺乳類の話>第3回

クマの年齢

群馬県立自然史博物館学芸員 姉崎 智子

博物館では、ツキノワグマの年齢をセメント質年齢査定法という方法を用いて査定します。クマの歯は、1年ですべての歯が萌出しますが、セメント質の歯根部には1年に1本、年輪ができ、年輪を数えると、クマの年齢がわかるのです。多くの場合、第1小臼歯が年齢査定には用いられますが、当館では同じ個体から複数の歯を抜いて、比較・検証します。歯は固いので、年輪を数えるようになるまでには、様々な薬品処理を行います。最終的には、歯根部を30μmにスライスし、切片をスライドガラスにのせ乾燥させ、染色・脱水・封入、顕微鏡で観察できるまでに約2週間かかります。さて、2014年度は、2012年度に引き続き、県内では多くのクマが捕殺されました。2014年度のクマの年齢を、過去の大量出沒年、平常年と比較すると(図1)、オスの年齢は、平常年、2012年、2006年よりも1~3歳の捕獲が有意に多く(p<0.01)、メスの年齢も平常年よりも1~3歳の捕獲が有意に多い傾向が明らかになりました(p<0.01)。メスに対するオスの性比では、平常年では1.7、大量出沒年では平均で1.9でした。しかし、2010年度以降をみると、2010年は1.64、2011年は1.33、2012年は2.42、2013年は2.70、2014年は2.30で、オスの捕獲が増加傾向にあることがわかります。2012年まではオス、メスともに平常年と比べても年齢構成に著しい違いはありませんでした。西日本では、大量出沒年は、若いオスが多く里に出沒することが報告されていますが、群馬県においては、堅果類が凶作、大凶作の年に、森の餌の不足によって年齢、性別を問わずクマが人里近くのクリなどの堅果類や、農作物を餌として利用するために出沒したと推察されました。しかし、2014年度は、オス、メスともに若い個体が多く捕獲され、以前の状況とは異なっていることがわかりました。これが、たまたまなのか、ほぼ各年で発生している大量捕殺によって、個体群全体が若齢化したのか、それ以外の要因によるものであるのかは、現段階ではデータが少ないため想像の域を出ません。今後、捕獲圧が強まりすぎているか継続したモニタリングを行うとともに、里に出沒しなくなるような対策が期待されます。クマが里に出沒しないようにするためには、クマを誘因する誘因物の除去、クマが出沒しにくい里山の環境整備、豊凶の影響を受けることなくクマが多様な餌を得られるような森林の保全や整備を実施していくことが大切です。

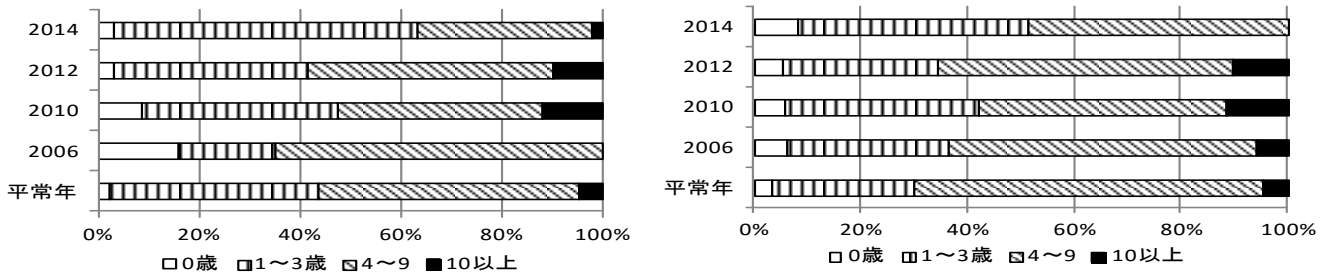


図1 平常年と大量出沒年のツキノワグマの年齢構成の比較(左・オス、右・メス)

<協会の声>

子どもたちと一緒に

第12期生 斎藤 千春

仕事の傍ら親の介護、仕事をやめて親の介護、そして両親を見送り、今は自由に使える時間がある。そんなとき、公民館のボランティアで子どもたちに本の読み聞かせをしていた時のことです。「本の中に出てきた木を見た事がありますか?」と問いかけました。「ぼくはマンションなので、本では見た事があるけど実物は見た事がない」との答え。他の子どもも同じような答えでした。高崎駅から徒歩5分の所にある小学校、公民館。数年前までは子どもの数が特に少なく、市全体が校区という時期が続きました。その後、駅近隣にマンションがニョキニョキと出来て、本来の校区に戻ってきた状態です。意識しないと自然と触れ合う機会が少ない地域ではあります。そんな事があってから少しして、生協ニュースでぐんま緑のインタープリター協会【自然の解説者養成講座】募集の記事を見ました。子どもたちと一緒に自然とふれあいながら話すことが出来たらいいなあと思い受講しました。ふれあいの森での土壌の仕組み、川の流れに入っている水生生物採集、森林の中でのネイチャーゲーム等、数多くの実体験は楽しく時間が過ぎるのもあっという間でした。受講後はハイキングに出かけると、足元や周囲に目配りしながら歩いています。すると、今まで見落としていた物がいかに多かったか気が付きました。これからはもう少しずつ学びながら自然と触れ合い、子どもたちと一緒に活動していきたいと思っています。

<協会が実施する事業・研修会等>

実施日	内容	会場
平成27年10月3日(土)	会員資質向上研修6「赤城山秋の自然観察会」	赤城山
平成27年10月11日(日)	藤岡市市民活動フェスティバル	藤岡市総合学習センター
平成27年10月17日(土)	前橋市委託事業3「ネイチャーゲームと落ち葉のしおり」	おおさる山乃家
平成27年10月25日(日)	会員研修7「シカの食害対策網巻きと自然観察」	赤城山
平成27年11月1日(日)	森の体験4「自然素材でリース作り」	赤城木の家
平成27年11月7日(土)、8日(土)	「覚満淵ササ刈り作戦」	赤城山覚満淵
平成27年11月28日(土)	会員資質向上研修8「多々良沼自然観察会」	多々良沼
平成27年10月10日(土)、24日(土)	インプリの森整備	インプリの森

<編集後記> 今朝、シュウブソウの美しさについてラジオで聞きました。そんなひそやかに咲く花に感動できることは幸せなことです。これから過ごしやすい気候となります。ハイキングや自然観察会等に参加して楽しみたいものです。(OS)